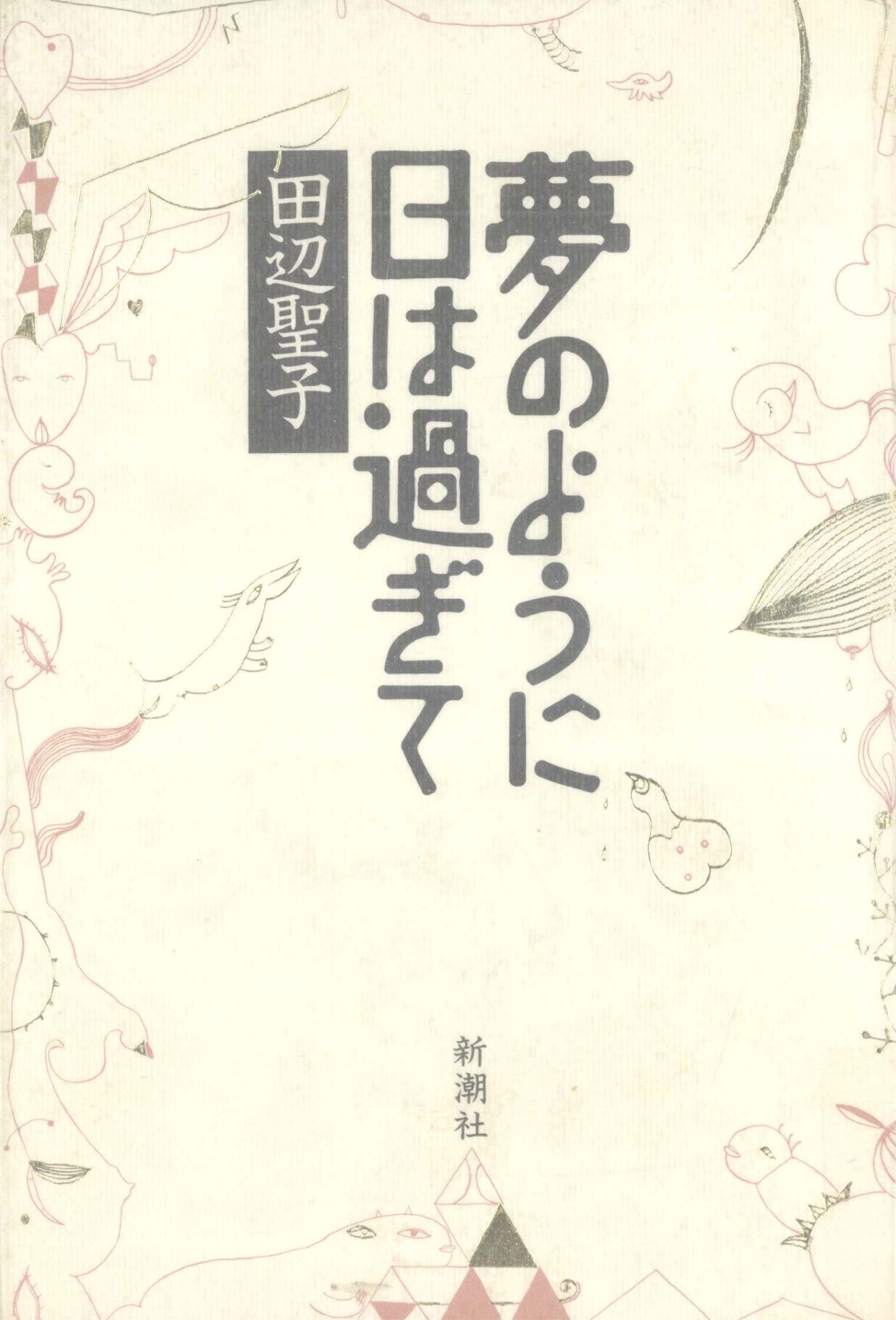


夢のよう 日は過ぎる

田辺聖子

新潮社



田辺聖子

夢のようには過ぎ去



新潮社

夢のように日は過ぎて

一九九〇年二月二〇日 発行
一九九〇年三月二五日 二刷

著者 田辺聖子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話(業務部) 03-2661511

(編集部) 03-2661541

振替 東京四一八〇八

印刷 二光印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。

© Seiko Tanabe 1990,
Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-313421-6 C0093

夢のように日は過ぎて ■ 目次

深追いして 7

夢のように日は過ぎて 37

かしこすぎて 69

恋の掛金はずれて 101

ファイフティ・ファイフティして

137

手ぶらで愛して

169

うしろめたくて

203

装画
邊見由実子

夢のように日は過ぎて

深追いして

日曜の朝、私は電話で電報を打たねばならなかった。べつに私でなくてもいいのだが、ゆうべあわただしく皆でそろって祝電を打とうという話がまとまり、そうすると小川峰子も徳田朝美も、柄井マリも、

「あ、あたし明日、春スキーへいくんだ」

「あたしは朝からいてへん。野暮用で」

「あたしも」

なんていい、何となく私が打つことになってしまった。

同僚の中谷なかやせつ子が結婚退社した。相手の男は鹿児島かごしまの男だということで、せつ子もそこへいってしまふ。一ト月ぐらい前に辞め、雛ひな祭りの日に城山観光ホテルで結婚式をあげるそうである。同僚といってもせつ子は私より後輩で三歳年下であるが、それだつて三十二だ。結婚がきまつたときは物凄ものすごく嬉うれしそうだつた。

「結婚したーい！　と思つてたもん。いつまで仕事するのかなあ……という気になつてた。鹿児島だつて青森だつてかまへんわよ」

と目も鼻もないありさま。せつ子の兄嫁さんが鹿児島かごしまの出身で、その遠い縁戚ということだつ

た。

「大阪で結婚式するんなら、みんなに来てもらうんだけど、鹿児島じゃあ、ねえ。それだけが残りの、タハハハ……」

なんていって、ニットデザイナーという仕事のほうは、全く心残りじゃないみたいだった。

会社はわりに有名なニットメーカーで、私はニットデザイナーとしても十一年働いている。この仕事は好きだし、サラリーも悪くないし、同じような年頃の仲間はみな独身なのでやりやすい。結婚しても勤める者が殆どなので、せつ子みたいに、仕事に未練なんか、微塵（みじん）粉灰（こな）も、まったくなさそうなのをみると、私も感慨があった。

「ね、ここだけの話やけど」

とせつ子は私にいう。

「結婚なんてつまらない、男なんてくだらない、とってたのは二十九までね。それ過ぎたら、つまらない結婚にあこがれるようになったわ。くだらない男の好もしさ、というのが目についてねえ……結婚が女の幸福なんてウソや、と思ってたけど、二十九すぎたら、「そーかなー」なんて気になってたの、でもこの会社じゃ、「結婚したい」なんて言葉、はずかしくて口に出されへん、という雰囲気あったでしょ。でも本心は、あたし、したい、したい、結婚したい」って、いつも欲も得もなく思ってたわよ、縁談持ってこられたとき、一ぺんでOKしたな。これがさ、桜島みたいにとっしりしたい男でさ、そうそ、芦村（あしむら）さん、写真見てくれる？ 彼の」

「要らん、要らん！」

と私はいった。ヒトの男の写真なんか見てどうしようっていうのだ。それに私は、見ると何か

ケチをつけたくなるにきまっている。私は人が不満やためらいを感じている時は別として、目も鼻もなく満足しているとき、ムズムズと水をさすようなことをいいたくなる癖があるのだ。

せつ子は有頂天で辞めていった。で、商品企画部の峰子や朝美、デザイナーのマリなんかとしゃべっていたとき、ともかく祝電でも打ってやるやないの、ということになったのだ。

日曜の朝、私は起きるなり、そのことを思い出したが面倒臭くてすぐ実行できない。

三十五の独り者の女の、日曜の朝はゴールデンタイムなのだ。六畳の居間に四畳半ほどのDK、まことに小さいバストイレ、しごくコンパクトだけれど押し入れがわりに大きくて助かる。ゆつくり御飯をたいて味噌汁をつくり、鮭を焼くという朝食、私はゴハン党である。ふだんはそくさとトーストとアップルティですませる朝食だが、日曜祝日の休日は、ちゃんとゴハンをたべるのだ。

春らしいレモンイエローのスウェットのトレーナーで私は、食堂の柱にかかった金の縁取りの鏡を覗く。

フラッパーにした髪は耳の下あたりでチリチリと拡がり、枝毛が出てやや傷んでいるが、この髪型にしてから若くなったみたい。

年下男をコマすときは平気で十歳ぐらいサバをよむ私なので、これなら二十五といっても通るなあ、とわれながらうなづく。

目尻のシワ、なんてできる人は、よっぽど前世でワルイことをしてきた人じゃないか。

私はまだすてきに張り切った皮膚だから、シワなんてどこにも見えない。その秘訣は私の考案した、

「タヨリ水」

のせいと、それから、私の生活信条のためだろうと思っている。

タヨリ水（タヨリというのは私の名前である）は、日本酒でつくる。あんまり安ものの酒はダメだけど、まあそこそこ、というようなのを、一升につき、梅干の中ぐらいのを二つ入れて煮切る。それをちよつと水で薄めたのを化粧水がわりに寝しなに塗る。グリセリンで薄める人もあるけれど、私は水か、お酒そのまま。

煮切らないと、肌へつけたときタタタしてしまふ。このタヨリ水のおかげで私はいまも肌はスベスベしている。しかしこの秘訣は誰にも教えてやらない。

すべての女が綺麗になつたつて面白くないのやからね。私だけが美しくありたいのさ。

芦村タヨリ、肌が綺麗でちよつとファニーフェイスで、縮れた髪がわんわんとひろがつて、ハタチから三十五まで幅広く年齢のサバがよめますという、そういう私に満足しているのだ。

背があんまり高くないのも若くみえていいと思つてゐる。長身は老けてみえますからな。すべて自分の条件を肯定的に考えるのも、私の抱懐する生活信条のせいである。

この考えでいくと、大いに自信が出てくるつてわけ。

私はこのごろ、古くいえば、

「処世訓」

というか、

「生活信条」「人生観」

というか、ともかく、好きなフレーズを思いついたのだ。

何だと思ひます？

というより、女三十五歳にして「こだわりフリーズ」の一つや二つぐらひは持たなくちゃ、あまりにアホっぽいではないか。しかも結婚してる女ならべつにそんなもの、なくてもかまわない、結婚してる女は、「こだわりフリーズ」なんか考えるヒマはないのやからね、連中は亭主・子供・家庭のことでツツ一杯の暮しの手帖なのだ。ほかに何を考えることもできない。仕事を持つてる女でも、子供が熱を出したとか、亭主が急に入院したとかいうときは、バカッと空白になつたような顔で、職場人生はその一瞬、真ッ白になっている。そうしてあわただしく早退したり欠勤したりしている。

そういう人間に、「こだわりフリーズ」なんか考えつけるわけはなく、また必要もないのだ。私はまだ独身だから、そういうものを發明して、それを内心ひそかに誇りにもし、抛りどころともしているわけ。

「ワインのない食卓は片目のない美女のよう」という言葉があるそうだけど、「こだわりフリーズ」を持たないシングル女は、タチの悪い背後霊（はごうれい）のよう」といったらいいかしら、きちっとした独自の人生観がなきゃ、独身女はふらふらして、誰にでもくつついていってしまうではないか。だから私は、三十五歳のキャリアアウーマンらしく、チャンと「こだわりフリーズ」を持っているのだ。

それは何か？

まだ人にはいつてないが、ここだけの話、

「アラヨッ」

というのだ。これは日本語である。かけ声と解釈してほしい。どんな時のかけ声、という指定はないのだが……。私の感じでは、飛び移る、乗り換える、乗り越える、ぶらさがる、その反対に、手を放す、高いところから思い切って飛び下りる、また木から木へ飛び移る、物を抛り投げる、撒き散らす、すべて思い切った行動をとるときのかけ声である。

これを、「ヨイシヨ」というのではダメである。ヨイシヨはすすまぬ気持を引き立てて、という風にきこえる。

「アラヨッ」というとき、本人の弾みがある。面白がつてやつてる感じがある。人の目を意識してるサーカスの曲芸みたいなどころがある。

なぜ「アラヨッ」というと、私は、すべてこの世は、変化に対応するときの姿勢できまると思うのだ。

どんな状況になっても、ヒョイ、とそれにうまく便乗、適応できれば好転するってものじゃないかしら。だから「こだわりフリーズ」を、

「ヒョイ」

としてもいいのだが、いまいち、気魄において欠ける気がする。「ヨイシヨ」同様、消極的な受け身の生きかたではないか。

そこへくると、

「アラヨッ」

というかけ声は、いかにも身にふりかかる苦難を、「待ってました！」というように聞こえるではないか。

私は、これから先、どんなことが起きても、

「アラヨッ」

で乗り切ろうと思う。この気持でいると、物ごとをくさくさ思わなくて精神衛生にいい。

私はあんまり学問はないんだけど（私、ファッション関係の短大を出てから編物学院に二年いった）、私のカンによると、日本の歴史というか、日本民族って、総体にいつて、

「アラヨッ」

の体質があるんじゃないかしら。徳川時代の泰平の夢が覚めて明治維新になったとき、一般大衆はとてもまごついたに違いないし、おびたらしい犠牲者も出たはずだけど、大体の大衆は「アラヨッ」と船を乗り移ったのである。そうしてまさかというような維新を実現させてしまっている。そりゃ無論、偉い人もたくさん出て、彼ら彼女らが民衆を引っ張っていったには違いないけど、それにしても民衆の裡なるものの中に、

「アラヨッ」

の精神がないと、とても実現するはずはなかったらうと思う。珍らしもの好き、変り身の早さ、ヒョイと移れる足もとの軽さ、そんなものが日本人にはあるに違いない。

昭和二十年の敗戦だって、戦後生れの私にゃよくわからないけど、父と母の話によれば、敗戦前と後は、昼と夜、白と黒ほど物みなすべて引っくりかえった、という。価値観から風俗から、発想から道徳から、地が天になり天が地になるほど入れかわった、ということだ。それでも民衆